

## イラク派遣／「根なし草」の焦り

谷口吉光（秋田県立大学）

12月9日、小泉内閣が自衛隊のイラク派遣を閣議決定した。このコラムではもっぱら秋田の農・食・環境について書いてきたが、今回はこの自衛隊のイラク派遣の問題を取り上げたい。「“あきた時評”でなぜイラク派遣？」と首を傾げる方がいるかもしれない。しかし、私には現在の秋田を覆っている行き詰まり感（閉塞感）と、アメリカに追随してしゃにむにイラクに自衛隊を送り込もうという小泉首相（とその支持者）の心情の間に深い共通点があるように思えるのだ。

その共通点を一言でいえば、「根なし草」ということだ。小泉首相は政治家としての根がないように思える。政治家として自らの基盤であるはずの自民党を「抵抗勢力」と平然と切って捨て、「自民党をぶっ潰す」と得意顔で宣言した。先の総選挙では長老の中曽根・宮沢両元首相に定年制を盾に引退を宣告した。そして今回の自衛隊のイラク派遣では、第2次世界大戦の教訓として日本人が選び取ったはずの平和憲法を十分な説明も議論もなしに骨抜きにしようとしている。

これらに共通するのは、小泉首相が自ら育ってきた政治的土壌を破壊し、そこに根を張ってきた数多くの日本人（多くは自民党の支持者）の信条の基盤を掘りくずし、彼らを根なし草にしてきたということだ。小泉自身にいわせれば、それは「改革の痛み」ということになろう。しかし、「改革者」を自認する小泉首相は改革の行方を示すことができない。示せないのではなく、ビジョンがないのだろう。なぜビジョンがないか。それは突き詰めれば小泉に根がないからである。

内閣発足から2年。約束した改革は進まず、内閣支持率は下がる。国民の不満が自分自身に向く気配を感じた小泉首相は、国民のエネルギーを日本再建のためではなく、アメリカ従属の対テロ戦争に向かわせようとしているのではないか。しかし、多くの国民はイラク派遣にしぶとく抵抗している。根のない首相は焦っている。強引に自衛隊派遣を既成事実化しようとしている。既成事実を積み重ねることで反対勢力をねじ伏せるとするのは日本の政治の常套手段である。多くの日本人が根を失い、煽動者の号令に動かされるとき、私たちが待ち受けるのは70年前に日本人が迷い込んだファシズム（全体主義）の悪夢である。その懸念がまったく過去の話だとは私には思えない。

今必要なのは1人1人が根なし草にならないことだ。今いる場所でどう生きていくかを真剣に考えよう。そしてお互い語り合い、励まし合い、助け合おう。それは秋田の閉塞感を打ち破り、これからの秋田の自律的發展を考えるための原点にもなる姿勢だと思う。

（朝日新聞「あきた時評」 2003年12月20日掲載分を加筆・修正した）